林黛玉、なぜ笑う

——清朝章回小説における“笑”のポライトネス——

木村英樹

提要　明清时代的章回小说中经常使用“笑道”这个动词，这在《红楼梦》中尤为常见。本文旨在揭示《红楼梦》中广泛使用“笑道”一词起因于“笑”与礼貌方策(politeness)相关的语义功能、“笑道”的形态学特征以及某种文学历史因素。文学历史因素指的是《红楼梦》作为一部处于宋代话本向近代小说过渡时期的文学作品所具有的特征。

关键词　章回小说　红楼梦　笑道　礼貌方策　前缀化

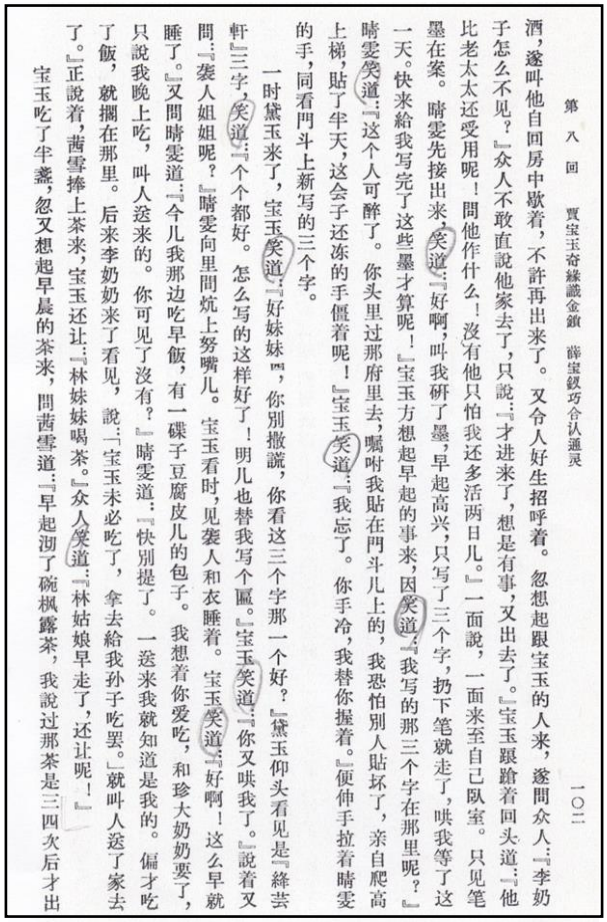
1. はじめに

林黛玉はよく“笑”う。賈宝玉もよく“笑”う。薛宝釵も襲人もよく笑う。『紅楼夢』の登場人物は誰彼問わずよく“笑”う。愚痴を言っては“笑”い、小言を言っては“笑”い、人に指図をしては“笑”い、叱りつけては笑う。世辞を言っては“笑”い、相手をなじっては“笑”い、物事に驚いては“笑”う。無論軽口を叩いても“笑”う。果ては相手の行き先や素性を訊ねてさえ“笑”う。

『紅楼夢』には“笑道”という動詞が夥しい頻度で現れる。“笑道”とは、文字通りに読めば「～と笑って言う」と訳すことのできる発話動詞である。『紅楼夢』の作者はこの“笑道”を全編に亘って多用し、事あるごとに登場人物に「“笑”ってものを言」わせる。右は『紅楼夢（全四冊）』（人民文学出版社、1972 年）の第一冊 102 頁の写しであるが、見ての通り、16 行中“笑道”が合計 9 度、ほぼ 2 行に 1 度の割合で現れる。

仮に日本語の小説に「…と笑って言った」という表現が 2 行に 1 度の頻度で繰り返し用いられたとしたら、いかにもくどくかつ稚拙の感は否めず、読者は甚だ興を削がれるに違いない。文学作品の態をほとんど成さないと言っても過言ではない。

ちなみに伊藤漱平氏（『紅楼夢１』平凡社、1996 年）による当該箇所の和訳では、9 例の“笑道”にただの１例も「笑って言った」という訳語が充てられていない。以下にそのくだりを抄録する。



第八回　賈宝玉奇縁識金鎖　薛宝釵巧合认通灵　一〇二

酒，遂叫他自回房中歇着，不許再出来了。又令人好生招呼着。忽想起跟宝玉的人来，遂問众人：『李奶子怎么不见？』众人不敢直說他家去了，只說：『才进来了，想是有事，又出去了。』宝玉跟蹬着回头道：『他比老太太还受用呢！問他作什么！沒有他只怕我还多活两日儿。』一面說，一面来至自己臥室。只見笔墨在案。晴雯先接出来，笑道：『好啊，叫我研了墨，早起高兴，只写了三个字，扔下笔就走了，哄我等了这一天。快来給我写完了这些墨才算呢！』宝玉方想起早起的事来，因笑道：『我写的那三个字在那里呢？』晴雯笑道：『这个人可醉了。你头里过那府里去，嘱咐我貼在門斗儿上的，我恐怕别人貼坏了，亲自爬高上梯，貼了半天，这会子还冻的手僵着呢！』宝玉笑道：『我忘了。你手冷，我替你握着。』便伸手拉着晴雯的手，同看門斗上新写的三个字。

一时黛玉来了，宝玉笑道：『好妹妹，你别撒謊，你看这三个字那一个好？』黛玉仰头看見是『絳芸軒』三字，笑道：『个个都好。怎么写的这样好了！明儿也替我写个匾。』宝玉笑道：『你又哄我了。』說着又問：『袭人姐姐呢？』晴雯向里間炕上努嘴儿。宝玉看时，见袭人和衣睡着。宝玉笑道：『好啊！这么早就睡了。』又問晴雯道：『今儿我那边吃早飯，有一碟子豆腐皮儿的包子。我想着你爱吃，和珍大奶奶要了，只說我晚上吃，叫人送来的。你可见了沒有？』晴雯道：『快别提了。一送来我就知道是我的。偏才吃了飯，就擱在那里。后来李奶奶来了看见，說：「宝玉未必吃了，拿去給我孙子吃罢。」就叫人送了家去了。』正說着，茜雪捧上茶来，宝玉还让：『林妹妹喝茶。』众人笑道：『林姑娘早走了，还让呢！』

宝玉吃了半盞，忽又想起早晨的茶来，問茜雪道：『早起沏了碗枫露茶，我說过那茶是三四次后才出

（『紅楼夢』（人民文学出版社、1972 年）より）

……晴雯がまっさきに出迎えて、笑いながらなじりました。
「よくまあ、わたくしにこんなに墨を磨らせておきながら…。（略）さあ、さ、このお墨の分だけは書ききっていただきませんことには」（略）宝玉はとたんに朝方のことを思い出し、にやにやしながら、
「で、私の書いたあの三字はどこにやったのさ？」
「ああら、いやですわ、若様、酔っていらっしゃいますのね。（略）」
　宝玉はこれを聞いて、照れくさそうに、
「けろりと忘れてたよ。（略）」
　そういうと、つと手を伸ばして晴雯の手を取り、（略）三文字をいっしょに仰ぎ見ているのでした。
　するうち黛玉が現れました。宝玉はにこにこ顔で声をかけ、
「ねえ。黛さん。正直なところを聞きたい、あの三字のうちで、できならどの字がいいかしらん？」
（略）黛玉は笑って、
「どの字もいいできばえですこと。（略）」
　宝玉は相好をくずし、
「そら、またわたしをおだてる気ですね」
　といっておいて、こんどは、
「襲人さんは？」
　とたずねます。（略）襲人は着衣のまま布団に入って寝ている様子。宝玉は笑いながら、
「へえ、やけに早手回しに温めてくれているんだね」
　といって、そこでまた晴雯にたずねました。（略）
　つづいてそこへ茜雪が茶を運んできましたので、宝玉は、
「さ、黛さん、お茶をひとつ」
　とすすめます。みなは笑い出し、
「まあ、林の姫さまでしたら、とうにお帰りでしたのに、まだおすすめになる気で」と冷やかします。（略）

（伊藤漱平訳『紅楼夢１』p. 296-299 より。傍線は本稿筆者）

9 例の“笑道”のうち、前掲原文 6 行目の 1 例（“晴雯笑道”）には和訳が省かれ、他の 8 例にはすべて異なる訳語が用いられている。同一の訳語の重複を避け、文体のくどさを回避しようとする訳者の苦心の跡が如実に見て取れる。しかしながら、訳者のそうした苦心を余所に、原文はあくまでも“笑道”の繰り返しである。当時の読者はなにゆえその重複を意に介さなかったのだろう。そもそも林黛玉たちはほんとうに「笑って」いたのだろうか。

『紅楼夢』には、“笑道”ほど多くはないが、“笑着道”や“笑了一笑道”といった連動構造による発話表現も用いられている。それらの表現形式とのあいだに何らかの意味的な対立を為して“笑道”が用いられていたとするなら、その意味とはなにかを問うことは少なくとも語学の分野においては有意義かつ重要な課題であると考えられる。

先行研究としては、後述の今井（2004）を除いて、文学または語学の観点から『紅楼夢』の“笑道”を対象に“笑”の意味を論究した例を筆者は寡聞にして知らない。本稿は『紅楼夢』に多用される“笑道”の“笑”の意味および形態論的機能を言語研究の立場から明らかにし、加えて“笑

道”の頻用の理由を文法論と文学史的観点の両面から模索することを目的とする。資料としては『紅楼夢（全四冊)』(人民文学出版社、1972 年）を用いる。本書は『程乙本』を底本として 1959 年に人民文学出版社から刊行された 120 回本の重版本である。

2.“笑道”の語構成

2.1 “V 道”について

『紅楼夢』の議論に入る前に、“笑道”という形式が語構成の面から見てやや特異な存在であることを確認しておきたい。

明清期の小説、とりわけ章回小説に広く用いられる“笑道”は、“笑”と“道”という二つの動詞――より正確には動詞性の形態素――から構成される複合動詞である。“笑”も“道”もともに自立語として単独で用いることも可能であり、“笑”は(1)のように〈笑う〉という表情の変化または行為を表し、“道”は(2)のように発話や記述の内容を英語の直接話法の如くそのままのかたちで導き、〈～という；～と語る〉という発話行為を表す。以下、本稿では口頭発話も書面記述もともに「発話」と呼ぶこととする。

(1)　贾政也掌不住笑了。(『紅楼夢』第九回)
　　［賈政も堪えきれずに笑った。］
(2)　宝玉又道:『表字?』 黛玉道: 『无字。』(同、第三回)
　　［宝玉はさらに「呼び名は？」と言う。黛玉は「呼び名はない」と言う。］

“道”は一定の造語力を具えており、“说、问、答、劝、念、叹、辨、叫、骂、应、央、想、唱、写、吩咐”等々の発話行為を表す動詞と広く結合して“V 道”というかたちの複合動詞を構成する。“道”と結びつくこれらの発話動詞は、現代語と同様、“说”と“问”を除いて、一般に、発話内容をそのままに導く機能が乏しい。それらが発話内容を導いて用いられる場合は通常“道”の発話引用機能に依存し、“答道、劝道”のように“V 道”のかたちで用いられる[1]。

“道”の結合対象、すなわち“V 道”の“V”は基本的に発話動詞であり、発話行為を表さない動詞は、一部の例外を除いて一般に“道”とは結びつきにくい。「食べながらものを言」ったり、「歩きながらものを言」ったり、「ぼんやりと呆けてものを言」ったりすることは日常茶飯の行為ではあるが、“吃道、走道、呆道”のような例は『紅楼夢』のみならず元代から明清期にかけての話本や小説には見当たらない。ただし、例外の一つとして、ものをゆび指す動作を表す“指”は発話動詞には属さない動詞でありながら“道”を伴って用いられる。『紅楼夢』にも(3)のような例が数例観察される。指示行為と発話行為の近接性を示唆する事例として興味深い。

(3)　那孩子（略）指道:『这就是他家。』(『紅楼夢』第六回)
　　［その子が（略)「これがその人の家です」と指さして言った。］

いま一つの例外は、ほかでもなく“笑”である。“笑”も発話動詞の類には属さないが、“笑道”は明清期の章回小説の類に遍く用いられる。また“笑”に類して喜怒哀楽の感情を表す“喜、哭、泣、怒”についても、“笑道”と同様に発話内容を導くかたちの“喜道、哭道、泣道、怒道”の例が、“笑道”の頻度にははるかに劣るものの少なからず観察される。感情の発露はしばしば発話行為を伴うという両者の近接性が、“说”などの発話動詞に準じて喜怒哀楽を表す動詞の類と“道”との結合を可能にしているものと考えら

[1] “答曰、劝曰”のように“曰”が用いられる例も少なくない。

れる。

“说”をはじめとする一連の発話動詞と“道”はともに発話動詞であり、その親和性に動機づけられて両者が結合することは至極自然な形態論的現象と考えられる。その意味において、発話動詞と“道”の結合は“V 道”における典型的なタイプと言える。それに対して“笑”などの非発話動詞と“道”の結合は非典型的なタイプの“V 道”と言える。その非典型な“V 道”のタイプに属する“笑道”が、明清期の小説類において、“问道”など一連の典型的な“V 道”の類をはるかに凌ぎ、“说道”に次いで多く用いられているという事実は後述の議論との関わりにおいて注目に値する。

2.2 “笑 V”について

“道”とは対照的に、“笑”の造語力は極めて限定的である。“道”のほかに“笑 V”のかたちで“笑”が結びつくことのできる動詞は“曰、说、问”など数語に満たないごくわずかな発話動詞に限られる。「笑って見る、笑って歩く、笑って食べる、笑って歌う、笑って読む」などはいずれも日常的な行為ではあるが、“笑看、笑走、笑吃、笑唱、笑读”といった類の複合動詞は明清期のテキストには見当たらない。“笑 V”というかたちは、発話行為を表すためだけに用意された別格の複合構造であると言える。

以上、本節の議論を踏まえて、“笑道”の特徴を語構成の観点から要約すると以下のようになる。すなわち、“笑道”とは、専ら発話行為を表すために合成語化された“笑 V”という希少なタイプの形式の一つであり、なおかつ、非発話動詞と“道”との結合からなるこの形式は、“V 道”という形式の範列にあっては非典型的なタイプ、言い換えれば破格のタイプに属するものである。“笑道”は、“道”の側から見ても“笑”の側から見ても特別仕様といった感のある、言わば「特注」の発話複合動詞と見ることができる。

その、特注の発話複合動詞が、先にも述べたように、明清期の小説においては“说道”を除く他のいずれの“V 道”の形式よりも多く用いられ、とりわけ『紅楼夢』においては際立って数多く用いられている。“笑道”は言わば「選ばれた形式」であると言える。なにゆえ「選ばれた」のか。その理由を明らかにすべく『紅楼夢』の議論に移る。

3.『紅楼夢』における“笑道”

3. 1 “笑道”の使用頻度

明清期の小説類にあって、『紅楼夢』における“笑道”の多用がいかに突出しているかを知るための初歩的な作業として、差し当たり、『水滸全伝』、『金瓶梅』、『儒林外史』、『児女英雄伝』、『紅楼夢』を対象に、それぞれの“笑道”の用例数を、電子コーパスを用いて概観してみる。『水滸全伝』と『児女英雄伝』については CCL（北京大学中国语言学研究中心）を用い、『金瓶梅』、『儒林外史』、『紅楼夢』については『中国基本古籍庫』（愛如生）を用いる。それぞれのテキストから索出された“笑道”の数は次の通りである。なお、“笑道”における“笑”が実際に〈笑う〉という行為を表す実質語として機能しているかどうかを明らかにすることも本稿の目的の一つであり、従って、“哈哈的笑道”や“大笑道”のように何らかの修飾成分を受けて明らかに〈笑う〉というリアルな行為の遂行を表していると読み取れる“笑道”の例についてはひとまず検索および考察の対象外とする。

『水滸全伝』: 226 例
『金瓶梅』: 241 例
『儒林外史』: 75 例

『紅楼夢（程甲本）』: 2137 例
『児女英雄伝』: 147 例

周知の通り、『水滸全伝』と『金瓶梅』はそれぞれ 120 回と 100 回から成り、総字数においては『紅楼夢』とそれほどの差はない。しかしながら、『水滸全伝』の“笑道”の数は『紅楼夢』のそれの 9 分の 1 足らずであり、『金瓶梅』も 8 分の 1 に満たない。『儒林外史』は総字数が『紅楼夢』のおよそ 2 分の 1 ではあるが、75 例対 2137 例という差は総字数の比率に見合わず大きくかけ離れている。『児女英雄伝』は全 40 回で構成され、回の数では『紅楼夢』の 3 分の 1 にあたるが、総字数はおよそ 60 万字あり、『紅楼夢』の 4 分の 3 に相当する。しかし、“笑道”の用例数は『紅楼夢』の 14 分の 1 ほどに留まる。電子コーパスの入力の精度や用いられた版本に関していくつか考慮すべき問題もあるが、それらを差し引いてもなお大凡の状況を把握するには十分な概数が示されていると見てよい。

こうした状況を念頭に置きつつ、『程乙本』を底本とする人民文学出版社版『紅楼夢（全四冊）』を対象に悉皆調査を行ったところ、『中国基本古籍庫』による索出結果とほぼ同数の 2088 例の“笑道”が得られた。手作業による調査であるため多少の見落としもあるはずであり、それらを見込めば総数およそ 2100 といったあたりが妥当な数字かと思われる。平均すると 1 回につき“笑道”が 17 乃至 18 例用いられているという勘定になる。最も多く用いられている第 19 回と第 28 回ではともに 44 例もの“笑道”が登場する。

念のため、『紅楼夢』と同じく清代に成立した『儒林外史』と『児女英雄伝』についても悉皆調査を行った。『儒林外史』は『紅楼夢』とほぼ同時期に成立しており、『児女英雄伝』は『紅楼夢』よりもおよそ 100 年遅く刊行されている。テキストには、『臥閑草堂本』（1803 年刊行）を底本とする『儒林外史』（中華書局、1972 年）と『北京聚珍堂本』（1878 年刊行）を底本とする『児女英雄伝』（中華書局、2013 年）を用いた。得られた結果は以下の通りである。

『儒林外史』（55 回）: 75 例
『児女英雄伝』（40 回）: 110 例

それぞれ 1 回につき、『儒林外史』ではおよそ 1 例、『児女英雄伝』では 2 乃至 3 例が用いられているという勘定になり、『紅楼夢』との差は歴然としている。先の電子コーパスの検索結果とも考え合わせて、『紅楼夢』が明清期の章回小説において、“笑道”の使用が際立って多い作品であったという認識は妥当なものと判断される。

3. 2　“笑道”の使用範囲

では、なにゆえ『紅楼夢』の作者はこれほどまでに多くの“笑道”を用いたのだろうか。冒頭にも述べたように、作者は、主要人物から端役の侍女たちに至るまで誰彼を問わず、さまざまな人物の発話に“笑道”を用いている。従って、特定の人物の発話に限定して“笑道”を用い、その人物の人柄を特徴づけるといったような意図が作者にあったとは思われない。

“笑道”に導かれる発話の内容もまたさまざまである。先に示した人民文学出版社版『紅楼夢』第 8 回の一節を例に取れば、9 例の“笑道”に導かれる発話は以下の通りである。

① 好啊，叫我研了墨，早起高兴，只写了三个字，扔下笔就走了，哄我等了这一天。快来给我写完了这些墨才算呢！

［よくまあ、わたくしにこんなに墨を磨らせておきながら……。朝方はずいぶんはずんでいらっしゃるなと思っておりますうち、三字お書きになっただけで

お筆を投げ出し、さっさとお出かけになるのですもの。ひっかかったのはわたくしたち、一日じゅう待ちくたびれて……。さあ、さ、このお墨の分だけは書ききっていただきませんことには]

② 我写的那三个字在哪里呢?

[で、わたしの書いたあの三字はどこにやったのさ？]

③ 这个人可醉了。你头里过那府里去，嘱咐我贴在門斗儿上的，我恐怕别人貼坏了，亲自爬高上梯，贴了半天，这会子还冻的手僵着呢!

[ああら、いやですわ、若様、酔っていらっしゃいますのね。ほら、あちらのお屋敷へいらっしゃるとき、出がけにわたくしにお言いつけになったではございませんか、これをその枢のうちに貼っておくようにって。わたくし、ほかの者にさせるのはいいが、ひょっとしておかしなぐあいに貼られてもと心配になりましたもので、自分で梯子によじ登って貼りつけましたの。いまだに手ならかじかんだままでございますわ]

④ 我忘了。你手冷,我替你握着。

[けろり忘れてたよ。おまえの手、かじかんでいるのだって？どれ、温めてあげる]

⑤ 好妹妹,你别撒谎,你看这三个字那一个好?

[ねえ、黛さん。正直なところを聞きたい、あの三字のうちで、できならどの字がいいかしらん？]

⑥ 个个都好。怎么写的这样好了! 明儿也替我写个匾。

[どの字もみないいできばえですこと。どうしてこうもご上達なさったのかしら？いつかわたくしにも額を一つ書いてくださいましな]

⑦ 你又哄我了。

[そら、またわたくしをおだてる気ですね]

⑧ 好啊! 这么早就睡了。

[へえ、やけに早手廻しに温めてくれているんだね]

⑨ 林姑娘早走了,还让呢!

[まあ、林の姫さまでしたら、とうにお帰りでしたのに、まだおすすめになる気で]

（①から⑨の日本語訳は伊藤漱平訳『紅楼夢１』からの引用）

三人（“晴雯、宝玉、黛玉”）と一組（“众人”）の人物によるこれら９通りの発話の内容は、非難、憤懣、要求、質問、不平、釈明、慰撫、依頼、褒めたて、驚き、嘲笑など多岐にわたる。それらの内容から〈笑い〉を動機づける何らかの表現論上の共通点らしきものを導き出すことはむずかしい。

無論、コンテクストから切り離して見た場合、これら一つ一つの発話が、にこやかに、あるいはおおらかに“笑”ってなされることそれ自体に語用論上何ら不都合はなく、そうした言語行動は日常的にも行われ得るものである。が、本稿が問題にしたいのは、それにしても“笑道”の使用頻度があまりにも高いということであり、かつ、上の例のように、しばしばコンテクスト内の極めて近い距離で何度も繰り返し用いられるということである。『紅楼夢』の作者が文体上のくどさを厭わずに繰り返し“笑”を“道”に被せたその表現意図とはいかなるものか、また、その作者の意図を反映した“笑”の意味的機能とはいかなるものか。本稿の関心はそこにある。

今井（2004）は、管見の限り、『紅楼夢』の“笑道”に着目し、“笑”の機能を言語研究の観点

から考察した唯一の先行研究である。ただし、議論の範囲は限定的であり、冗談と皮肉と脅しという三つのタイプの発話に用いられた場合の“笑道”のみが考察の対象とされている。今井氏は三つのタイプの発話に用いられた“笑道”について、メタコミュニケーション的メッセージの観点から“笑”の機能の特徴づけを試みている。

今井氏は、これら三つのタイプの発話の導入に用いられる“笑”の機能を、「発話が字義どおりではないことを示すシグナル」(今井 2004:15) と捉える。すなわち、話し手の真意は字面通りの発話内容とは異なるということを相手に伝えるためのシグナル、言い換えれば、自らの発話を額面通りに相手に受け取らせないためのシグナルとして「笑う」というノンバーバルな行為が機能していると主張する。皮肉の例で言えば、仮に“大了”という発話者が「奥様は古今のことにたいへんよく通じていらっしゃいます」という発言を皮肉として相手に伝えたいとする;しかし、ただ“奶奶最是通今博古的。”と発話したのでは相手に字面通りの褒め言葉と受け取られかねない;そこで、“大了”は、これは皮肉なのだというメッセージを伝えるべく、〈笑い〉を伴いつつ発話するという方略を選ぶ;〈笑い〉は「発話が字義どおりではな」く、皮肉であることを示すシグナルとして機能する;“大了笑道:奶奶最是通今博古的。”という一文は、そうした皮肉のシグナルを仕込んだ方略的な行為を表現している、というのが今井氏の主張である。

確かに、笑いつつ皮肉を言うという行為は日常よく見かけるものではある。しかし、一方で、笑顔で人を褒めるというのもまた極めて日常的な行為である。“大了笑道:奶奶最是通今博古的。”という一文は文脈によっては字面通りの称賛の発言として問題なく成立する。つまりは、〈笑い〉つつ発話がなされたとしても、皮肉の発話か称賛の発話かが聞き手に的確に伝わる保証はないということであり、だとすれば、〈笑い〉が皮肉であることを相手に伝えるためのメッセージとしてどれほど有効に働くかは甚だ疑わしい。

今井氏の主張の妥当性についてはなお議論の余地がありそうにも思われるが、今は措くとして、急ぎ想起すべきは、先にも述べた通り、『紅楼夢』における“笑道”は冗談や皮肉や脅し以外にも、非難、憤懣、要求、質問などさまざまな表現論的タイプの発話に用いられているという事実である。仮に今井氏の主張が上記三つのタイプの発話に関わる“笑”については妥当であったとしても、他のタイプの発話に用いられる“笑”の機能には必ずしも妥当しない。例えば先の①の“快来给我写完了这些墨才算呢！”のように、相手に発話内容を字面通りに理解してもらわなければならない要求タイプの発話に用いられる“笑道”や、あるいは②の“我写的那三个字在哪里呢?”のように、同じく相手に発話内容を字面通りに理解してもらわなければならない純然たる質問タイプの発話に用いられる“笑道”について、それらの“笑”に「発話が字義どおりではないことを示すシグナル」という説明は当てはまらない。多様な表現論的タイプの発話に広範に用いられる“笑道”について、いずれの“笑”にも共通する何らかの機能を的確に捉えるためにはより一般性の高い特徴づけが求められる。

とは言え、現代中国語の“个”の意味や日本語の「の」の機能を特徴づけることが容易でないことからも窺えるように、当該の形式の使用範囲が多様であればあるほど――より正確に言い換えれば、当該の形式の統語上の選択制限が緩く、共起する対象が多面的であればあるほど――、その形式の意味や機能を特徴づけることはむずかしくなる。2100 例の“笑道”が立ち並ぶ雑木林のなかを彷徨っているばかりでは一向に出口が見えてこない。そこで、ひとまず視点を置き換えて『儒林外史』の状況を探ってみることにする。

4.『儒林外史』における“笑道”

4. 1　“笑道”の使用範囲と使用頻度

清代中期、『紅楼夢』よりもやや早くに成立したとされる『儒林外史』においては、先にも述べたように、“笑道”の使用が 1 回につき 1 例程度に留まり、『紅楼夢』よりも使用頻度がはるか

に低い。それだけに、使用範囲が見極めやすく、用法上の特徴も把握しやすい。悉皆調査によって得られた 75 例の“笑道”に導かれる発話をまず構文論の観点から眺めてみると、なにより反語表現の多さに目を惹かれる。(4)(5)(6)のように疑問詞や“难道”を用いた反語表現を導く“笑道”が計 21 例、すなわち 75 例中のおよそ 4 分の 1 強を占めている。

(4)　張鐵臂笑道:『這有何難!』[2]（『儒林外史』第十二回）
　　［張鉄臂は「これのなにがむずかしい！」と（笑って）言った[3]］
(5)　又笑道:『徵辟難道算得正途出身麼!』（同、第三十四回）
　　［さらに「民間から召し出されての任用となれば、試験に合格して任用された正規のキャリアにはならないではないか!」と（笑って）言った］
(6)　鄒泰來笑道:『這成甚麼款! 那有這個道理!』（同、第五十三回）
　　［鄒泰来は「それがどんな型になるというのか！そんな道理がどこにある！」と（笑って）言った］

議論の便宜上、ここでは反語表現の発話を一括りにし、残りの 54 例の“笑道”に導かれる発話については表現論の観点から、（ⅰ）聞き手にとって好意的な発話のタイプ（以下、「聞き手にとって」は省略する）、すなわち相手にとってポジティブな内容を表すタイプ、（ⅱ）好意的ではない発話のタイプ、すなわち相手にとってネガティブな内容を表すタイプ、（ⅲ）好意的とも非好意的ともどちらとも言い難い冗談・軽口のタイプ、そして、（ⅳ）単なる質問という 4 つのタイプに分けて考えてみることにする。なお、本稿では、以下、好意的な発話と非好意的な発話を一括して「好意・非好意の感情を含む発話」と呼ぶことにする。

（ⅰ）の好意的な発話のタイプとは、具体的には、(7)のように「歓待」の意を表す発話、(8)のように相手の発言に対する「同意」を示す発話、(9)のように「好意的な提案」を述べる発話、(10)のように「好意的な助言」を述べる発話、(11)のように「快諾」の意を示す発話、(12)のように「請願」の意を述べる発話などがこれに該当する。

(7)　笑道:『(略）請進艙裏去。』（『儒林外史』第十回）
　　［「(略）どうぞ船室のなかにお入りください」と（笑って）言った］
(8)　笑道:『正是為此。』（同、第二十五回）
　　［「まさしくその通り」と（笑って）言った］
(9)　笑道：你只去權坐幾天。不到一個月,包你出來,逍遙自在。』（同、第三十五回）
　　［「ほんの数日牢獄で我慢しなさい。ひと月もすれば出て来て自由の身になれることを請け合いますから」と（笑って）言った］
(10) 笑道:『這個倒不消慮。』（同、第十回）
　　［「それはご心配には及びません」と（笑って）言った］
(11) 笑道:『還是門下效勞。』（同、第二十九回）
　　［「やはりわたくしめがひと働き致しましょう」と（笑って）言った］
(12) 笑道:『這些人，讓門下去傳。』（同、第三十回）
　　［「この者たちには、わたくしめに伝えに行かせてください」と（笑って）言った］

[2] テキストに用いた『儒林外史』（中華書局、1972 年）に倣い、用例の表記には繁体字を用いる。
[3] “笑道”における“笑”の意味が特定できない段階では、“笑道”に対してひとまず「（笑って）言う」という訳語を充てておく。

（ⅱ）の好意的ではない発話のタイプとは、(13)や(14)のように相手の発言に対して「否定」あるいは「不同意」の意を表す発話、(15)のように「反論」あるいは「反駁」を唱える発話、(16)のように「詰問」する発話、(17)のように相手の言動を「非難」する発話、さらには(18)のような「悪態」もしくは「罵詈」などがこれに該当する。

(13) 笑道:『先生，你此言誤矣!』(同、第二十回)
［「先生、あなたの仰っていることは間違っている」と（笑って）言った］
(14) 笑道:『我不信!』(同、第四十六回)
［「信じられん！」と（笑って）言った］
(15) 笑道:『先生，這是而今詩社裏的故套』(同、第二十九回)
［「先生、それは昨今の詩壇の月並みな慣習です」と（笑って）言った］
(16) 笑道:『朝廷叫你去做官，你為甚麼粧病不去?』(同、第三十四回)
［「朝廷があなたを取り立てようとしておられるのに、どうしてあなたは仮病など使って行こうとはなさらないのですか？」と（笑って）言った］
(17) 笑道:『清平世界，蕩蕩乾坤，把彈子打瞎人的眼睛，卻來這店裏坐的安穩!』
(同、第三十九回)
［「天下の世に、白昼堂々、弾を打って人の目を潰しておきながら、この店で平然と座っているとは！」と（笑って）言った］
(18) 笑道:『你這匪類!下流無恥極矣!』(同、第三十二回)
［「この人でなし！下司で恥知らずの極みだ！」と（笑って）言った］

（ⅲ）のタイプには(19)のような冗談あるいは軽口の発話が該当する。

(19) 笑道:『前日你得見妙人麼?』(同、第三十回)
［「先日は美人にお目に掛れましたか？」と（笑って）言った］

（ⅳ）のタイプとしては(20)のただ１例のみが該当する。

(20) 笑道:『他姓甚麼?』(同、第二十九回)
［「あの男の名は？」と（笑って）言った］

それぞれのタイプの発話に用いられる“笑道”の用例数の内訳は次の通りであり、好意的な発話を導いて“笑道”が用いられる例が最も多く、単なる質問を導いて用いられる例が最も少なく、ただの１例にすぎない。

（ⅰ）好意的発話を導く例：33 例
（ⅱ）非好意的発話を導く例：16 例
（ⅲ）冗談・軽口を導く例：４例
（ⅳ）単なる質問を導く例：１例

『紅楼夢』においては“笑道”は単なる質問、事実の叙述、発話者の判断など聞き手に対して好意的でもなければ非好意的でもないニュートラルな発話にも広くかつ多く用いられているが、それとは対照的に、『儒林外史』の“笑道”は好意・非好意の感情を含む発話に偏って用いられている。この点は後述の議論とも関わって留意したい。

加えてもう一点、非好意的な発話のタイプにも少なからず“笑道”が用いられているという点にも注目したい。“笑道”が好意・非好意の感情を含む発話を導く例は計 47 例を数えるが、そのうちのおよそ 3 分の 1 は(13)から(18)のような非好意的な発話を導いて用いられている。

一般的な社会通念として、〈笑い〉という現象もしく行為は典型的には〈おかしみ〉〈歓喜〉あるいは〈好感〉といった類いの感情の発露として認識されていると考えられる。だとすれば、冗談やポジティブな内容をもつ好意的な発話に〈笑い〉が伴うことは理解に難くない。その意味で、(19)のような冗談や(７)から(12)のような好意的な発話に“笑道”が用いられても何ら不思議ではない。ところが、『儒林外史』の作者は、一見〈笑い〉とは親和性に欠けそうに思われる非好意的な発話にも“笑道”を相当数用いている。このことをどう理解すればよいのか。その議論に入る前に、まずは、先に触れた反語表現を導いて多用される“笑道”について考えてみたい。

4. 2　反語表現を導く“笑道”の機能

反語文とは先の(4)から(6)のように、構文上は疑問文のかたちを取りながら、実は発話者の強い肯定の判断または強い否定の判断を表すというタイプの構文である。「言わずもがな」という発話者の確固たる信念を含意するこの種の文表現は、ややもすれば押しの強い威圧的な語気を聞き手に感じ取らせかねない。日本語においても「これはむずかしくない」という平叙文と「これのどこがむずかしい」という反語文とでは聞き手に与える表現論的な印象が明らかに異なる。次の(21)では、「神降ろし」ならぬ「仙人降ろし」の達人と称される陳和甫の息子、陳和尚が、自分の素性を疑った相手の発言を言下に否定し、怒気を含んで“天下那里有冒认父亲的!”と発している。言わずと知れた世の道理を確固たる信念をもって唱えることで相手をねじ伏せようとする陳和尚。その口吻を伝える上で反語文のひと言は十分に効果的である。

(21) 丁言志道:『(略) 恐怕你也未必是他的令郎!』 陈和尚脑了道:『你这话胡说!天下那里有冒认父亲的!』(『儒林外史』第五十四回)

［丁言志が「(略) 思うにお前さんは彼（陳和甫）のご子息なんかじゃないかもしれない！」と言うと、陳和尚は怒って「よくもそんなでたらめを！この世に自分の父親の名を騙るものがどこにいる！」と言った］

このように、確固たる信念に基づく言わずもがなの言明を表す反語文は、有無を言わせぬ、強圧的とも受け取られかねない鋭角的な印象を相手に与えるという表現論的特性を孕んでいる。それだけに、物語の作者にとっては(21)のような状況を描く上で格好の構文となる。

一方、日常のコミュニケーションの場では、強圧的ではなく、押しつけがましくもなく、角の立たない話し振りで、発話者自らの肯定的判断や否定的判断を、確固たる信念に基づくゆるぎないものとして伝えたいという状況もしばしばある。物語の作者にとっても、登場人物の発話をそのようなものとして表したい、言い換えれば、そのようなものとして読者に伝えたいと意図する場面が当然あり得る。それにはどのような表現形式が可能だろうか。言わずもがなの確たる断言を表す発話には反語文が最適である。しかし、それをそのまま用いて、例えば“陈和尚道:『天下那里有冒认父亲的!』”とすると、反語文本来の特性からして、読者は押しの強い鋭角的な発話がなされていると読み取る可能性が高い。作者としてはそのリスクは避けたい。とは言え、反語文の確たる断言力も捨てがたい。そこで“笑”に白羽の矢が立てられる。“笑”を“道”に被せて“陈和尚笑道:『天下那里有冒认父亲的!』”とすることで、反語文の確固たる断言力は保証され、併せて、〈笑い〉を伴ったにこやかな話し振りを表す“笑道”の一語を以って、反語文の強圧性を和らげることも可能になる。角の立たない、しかし確たる断言が可能になるということである。

次の日本語の例では、主人公の武士が幼馴染に口荒く「何をぬかす」と、反語文のひと言を吐

いている。

(22) 「それはおれには出来ん。本人が言い出すまではな」
「何をぬかす」
兵馬は汚い言葉を使った。(藤沢周平『隠し剣孤影抄』)

ここまで読むとなにやら不穏な空気が漂う。が、文章はこう続く。

(23) 「それはおれには出来ん。本人が言い出すまではな」
「何をぬかす」
兵馬は汚い言葉を使った。が、顔は笑っていた。

下線部の一文が添えられることによって主人公の発話時の表情が浮かび上がり、問題の反語表現が親しさゆえの軽口であったことが判明する。読者の緊張は瞬時にほぐれる。〈笑い〉にはこうした働き、すなわちネガティブ・ポライトネスの発動を回避し得る機能がある。いわゆる「回避儀礼」(Goffman1967) の方略である。笹川(2020) は、発話に添えられる〈笑い〉には相手のフェイスを脅かすリスクを回避する機能があるという事実、より具体的言えば、「相手に物質的・精神的な負担をかけると予測される」発話については、発話者がそれに〈笑い〉を添えることで「相手を脅かす意図がない」という意思を示すことができるという事実を社会言語学の観点から明らかにしている。(23)の下線部はこの回避儀礼としての〈笑い〉の効果を巧みに捉えたものと言える。

反語文に“笑道”を用いる『儒林外史』の作者の意図も (23)の作者のそれに通じるものがある。日本語であれば、「この世に自分の父親の名を騙るものがどこにいるだろうか」あるいは「……どこにいるでしょうか」のように然るべき文末表現を加えることで、反語文に付き纏う「威力」もしくは「圧力」めいた語気を和らげることが可能である。中国語にはそのように反語文を何らかのモダリティで包み込むという文法的手段は存在しない。少なくとも近代から現代に掛けての中国語には存在しない。その穴を埋めて反語表現の〈和らげ〉に働いているのがまさしく“笑道”の“笑”であると考えられる。作者の表現意図という観点から言い換えれば、作者すなわち表現者は、当該の人物の反語表現による発話が強圧的もしくは鋭角的なものではないということを――すなわち、「相手を脅かす意図がない」ものであるということを――読者に伝えるべく、〈笑う〉という行為の回避儀礼に与る機能を“笑”という語彙形式に託しているということである。反語表現に“笑道”が多く用いられている理由はまさにそこにあると考えられる。

4. 3　非好意的発話を導く“笑道”の機能

(13)から(18)のような非好意的な内容の発話に多く用いられる“笑道”についても、反語表現の場合と同様、〈和らげ〉の手段として、すなわちネガティブ・ポライトネスの発動を回避するための手段として用いられていると考えられる。相手にとって好意的でない発話とは「相手に物質的・精神的な負担をかけると予測される」発話にほかならない。否定もしくは不同意から悪態に至るまで、程度の差こそあれ、相手にとって好意的でない内容を含む発話は一様に相手のフェイスを脅かす可能性が高い。つまりは角の立つ振舞いである。次の(24)では、不埒な放蕩息子に父親の楊執中が“畜生！”と悪態をついて叱りつけている。非好意的な発話の典型とも言える悪態は、本来はこのように相手のフェイスを脅かし、威嚇することを目的として発せられるものである。

(24) 楊執中道:『畜生!那裏去!還不過來見了鄒老爺的禮!』(『儒林外史』第十一回)
［楊執中は「人でなし！どこへ行くんだ！こっちへ来て鄒さまに挨拶をせんか！」と言った］

同様に次の(25)でも先に(18)で示した悪態が用いられている。「私が出世した暁に、お前さまがたかりに来たりしたら、部屋に閉じ込め、豆腐ばかり食わせてやりますぞ」と戯言を言った相手に、杜少卿が“你這匪類!下流無恥極矣!”と悪態を浴びせるという一齣であるが、(24) の悪態とは異なり、こちらは和気藹々の楽しい酒席での軽口であって、字義通りに相手を脅かそうとするものではない。作者はそのことを読者に伝えるべく“笑道”を用いている。(24) の楊執中の発話がただの“道”で導かれているのとは対照的である。

(25) 臧蓼齋道:『(略)像你這樣大老官來打秋風,把你關在一件房裏,給你一個月豆腐喫,蒸死了你!』
杜少卿笑道:『你這匪類!下流無恥極矣!』(『儒林外史』第三十二回)
［臧蓼齋が「(略) あなたのような立派な御仁がわたしのところへたかりにおいでになったら、部屋に閉じ込めて、ひと月のあいだ豆腐ばかり食べさせて蒸し殺しにしてさしあげますよ」と言うと、杜少卿が「この人でなし！下司で恥知らずの極みだ！」と（笑って）言った］

このように、日常の対話においては、好意的でない内容の発話が、好意的でないがゆえに相手を脅かさないようにとの配慮を伴って発せられるという場面も多々ある。そうした場面の描写を意図して、作者が登場人物に“笑道”させた結果が先の(13)から(17)および(25)の例をはじめとする計 16 例の“笑道”であると考えられる。

以上、本節では、『儒林外史』に用いられる計 75 例の“笑道”のうち、好意的でない発話と反語表現の発話を導いて用いられる例がその半数を占めるという事実に着目し、それらの“笑道”における“笑”の機能を考察した。結論としては、当該の“笑”は、ネガティブ・ポライトネスの発動を回避する手段としての〈笑い〉、すなわち、反語表現の強圧性や非好意的発話の威嚇性を緩和する手段としての〈笑い〉を表す語彙形式として機能しているということである。平たく言えば、角の立つ表現あるいは立ちそうな表現を〈和らげ〉るというポライトネス機能を担う語彙形式として“笑道”が用いられているということである。この結論を踏まえ、議論を『紅楼夢』に戻す。

5.『紅楼夢』における“笑道”の機能

『儒林外史』の“笑道”は用法が限定的であり、反語表現の発話と好意・非好意の感情を含む発話、すなわち聞き手にとって好意的な発話と非好意的な発話に集中して用いられていた。なかでも反語表現の発話と非好意的な発話を導いて用いられる“笑道”には、発話に対する〈和らげ〉の機能が託されているという点が特徴的であった。『紅楼夢』における“笑道”は、この『儒林外史』における“笑道”の〈和らげ〉機能が一層拡張したかたちで用いられているものと考えられる。

『儒林外史』における“笑道”の〈和らげ〉機能は専ら反語表現の発話と非好意的発話を対象とし、その種の発話に内蔵されるネガティブ・ポライトネスの回避を目的とするものであった。一方、『紅楼夢』の“笑道”は、反語表現や非好意的発話だけに限らず、例えば次の 3 例のように、好意的でも非好意的でもない、ポライトネスに関してニュートラルな内容を語る発話にも広くか

つ多く用いられている。

(26) 贾政回头笑道:『诸公请看，此处题以何名方妙？』(『紅楼夢』第十七回)
［賈政は振り返って「みんな見てごらん、ここは何と名付ければいいだろうかねぇ」と言った］
(27) 贾政笑道:『可惜不得入了。』(同、第十七回)
［賈政は「残念ながら入れないね」と言った］
(28) 雨村（略）又问:『不知令亲大人现居何职？只怕晚生草率，不敢进謁。』 如海笑道:『若論舍亲，与尊兄犹系一家，乃荣公之孙：大内兄现袭一等将军之职，名赦，字恩侯。二内兄名政，字存周，现任工部员外郎，(略)。』(同、第三回)
［雨村は（略）さらに訊ねた。「ご親戚のお方がたはいまどういう官職にお付きなのかな？わたくしめのような粗忽者が参上するなどとても恐れ多くて」 如海は「親戚の者どもはと申しますと、あなたさまと同姓でございまして、上の義兄は現在は一等将軍の職を継いでおり、名は赦、呼び名は恩侯と申します。二番目の義兄は名は政、呼び名は周と申しまして、現在は工部の員外郎に任ぜられており、(略)」と言った］

(26)では、一族郎党を引き連れ、完成したばかりの庭園を案内して歩く賈政が、一つの築山に差し掛かった折、お伴の者たちに問い掛ける、そのひと言に“笑道”が用いられている。(27)では、同じくその庭園で水門の洞に入ろうと思いたった賈政が、付き従う賈珍から「船は建造中でまだ完成しておりません」と告げられて、「残念ながら」と諦め、「(洞の中には）入れないね」と発したひと言に“笑道”が用いられている。(28)では、件のご親戚はどういう官職についていらっしゃるのかとの質問に対して、如海が斯く斯く云々こういう人物でございますと返答する、その一通りの叙述に“笑道”が用いられている。それぞれ文字通りの質問であり、状況判断であり、あるいは事実の叙述であって、いずれも相手にとっては好意的でもなければ非好意的でもない発話である。

このように、『紅楼夢』の“笑道”は、『儒林外史』のそれとは異なり、導く発話の種類を選ばず多面的に用いられている。そこで一つの仮説として思い至るのは、『紅楼夢』の作者は、発話の内容の如何を問わず、唯々、和らいだ穏やかな話し振りで発話がなされているということを表すためだけに“笑道”を用いているのではないかということである。日本語には高い生産性を以って丁寧表現を構成する「です」「ます」「ましょう」などの文末形式がある。『紅楼夢』における“笑道”の“笑”は、譬えて言えばこれらの文末形式に匹敵しそうなポライトネスに関わる表現論的機能を担う形式として用いられているのではないだろうか。

仮にこの仮説が妥当なものであるとするなら、形態論的には、当該の“笑”はいわゆる虚化を経て、もはや動詞本来の〈笑う〉という動作を表す実質語としての機能を失い、むしろ接頭辞に近い形式、すなわち“道”に接して話し振りの和らいだ発話であることを表す接頭辞的な形式に転じていると見ることもできる。『儒林外史』における“笑道”が複合語であるのに対して、『紅楼夢』のそれは一種の派生語に転じているということである。すなわち、『儒林外史』の“笑道”は、ネガティブ・ポライトネスの回避を意図した〈笑い〉という行為を表す実詞としての“笑”と、同じく実詞である“道”とが結合した複合語であったのに対して、『紅楼夢』の“笑道”は、動詞本来の実質的な意味を失い、虚詞に転じた接頭辞的な“笑”と実詞の“道”との結合からなり、より派生語に近い合成語に転じているということである。

当該の“笑”が虚詞化し、動詞本来の実質的な意味を失っていると推測することの一つの根拠は、“笑道”とは別に、(29)や(30)のような、“笑着道”あるいは“笑了一笑道”といった連動式の句構造も随所に用いられているということである。

(29) 薛蟠笑着道:『那一箱是给妹妹带的。』亲自来开。(『紅楼夢』第六十七回)
［薛蟠は笑いながら「そっちの箱は妹に持ってきたの」と言い、自分で開けようとする］
(30) 贾政笑了一笑道:『既这样，皇天自然不负他的。』(『紅楼夢』第九十三回)
［賈政はにこりと笑って「そうである以上、天も当然あやつにそっぽを向いたりはなさらない」と言った］

“笑着”や“笑了一笑”といった動詞表現は〈笑う〉という動作行為を明確に表している。ほかにも、作者は“微笑道”、“大笑道”、“含笑道”のような表現を少なからず用いており、発話に伴うリアルな〈笑い〉の動作を細かく表し分けることも怠っていない。このように、一方では“道”に被せてリアルな〈笑い〉を表すいくつかの表現形式を用いながら、一方では、それらとは別に“笑道”という表現形式を用いている――しかも、“笑着道”や“微笑道”の類をはるかに凌ぐ2000 余例という多さでそれを用いている。状況証拠的ではあるが、このあたりに、“笑道”を用いる作者には〈笑い〉という行為を表すこととは別の意図が働いていたのではないという推測が生まれる。現に、『紅楼夢』には、〈笑う〉という行為がどうにも相応しくなく感じられる場面で“笑道”が用いられているという例も少なくはなく、そのことも上記の推測の妥当性を支持するものと思われる。一例を挙げれば、次の(31)は、侍女を押さえつけて邪な無理強いを働く茗烟が、その現場を宝玉に見咎められ、手酷く叱責されたあと、その侍女の名を問われて、おずおずと答えるという一齣である。「慌ててその場に跪き（宝玉に）許しを乞い願い」つつ神妙に侍女の素性を語ろうとする茗烟に〈笑う〉という行為は相応しくなく思われるが、しかし、作者は“笑道”を用いている。

(31) 茗烟见是宝玉，忙跪下哀求。(略) 宝玉因问:『那丫头十几岁了?』(略) 又问:『名字叫什么?』茗烟笑道:『若说出名字来话长，真正新鲜奇文!他说他母亲养他的时节，做了一个梦，……』(『紅楼夢』第十九回)
［茗烟は宝玉だと分かると、慌てて跪いて許しを乞い願った。(略) 宝玉はそこで「あの娘は歳は十いくつだ？」と訊ねた。(略) 宝玉はさらに「名は何という？」と訊ねる。茗烟は「名前を言うとなりますと、話は長くなるのですが、まことに新奇な話でございまして、なんでもあの娘の母親があの子を産み落としたときに夢を見たそうで……」と言った。］

茗烟にとって「笑って」話せる状況であるとは考えにくい。茗烟のこの場の行動を理解するには、「笑って言った」のではなく、和らいだ口調で鄭重に話したと読み取る方がより自然であると思われる。同様のことは(32)についても言える。

(32) 袭人在床沿上坐了。鹦哥笑道:『林姑娘正在这里伤心，自己淌眼抹泪的，说:「今儿才来了，就惹出你家们哥儿的病来。倘或摔坏了那玉，岂不是因我之过!」所以伤心，我好容易劝好了。』(『紅楼夢』第三回)
［襲人が寝台のへりに腰を下ろした。鸚哥は「お嬢様はいまここで悲しんでおいでなのです。ひとり涙を流し流し、『今日こちらに来たばかりだというのに、もうお坊ちゃまに癇癪を起させてしまった。もしもあの玉をぶつけて壊しでもされようものなら、まちがいなくわたしの落ち度のせいだわ！』と仰って、それで悲しんでおられるのです。いまようやっと慰めてさしあげて落ち着かれたところです。」と言った］

夜が更けても寝付けそうにない黛玉の身を案じて、賈家の侍女の襲人が部屋に入って来る；黛玉に付き添っていた林家の侍女の鸚哥が、すっかり落ち込んでいる黛玉に代わって事のいきさつを襲人に語って聞かせるという場面である。これもまた笑って話せる状況でもなければ、にこやかに語れる話の内容でもない。“笑道”を「笑って言った」と読むにはいささか無理がある。やはり和らいだ口調で穏やかに語る鸚哥の話し振りを表していると理解するのが妥当だと思われる。『紅楼夢』には、この二例に限らず、“笑道”が用いられていながら、リアルな行為としての〈笑い〉が伴われているとは考えにくい例が多数現れる。

“笑道”の“笑”が接頭辞化していると見ることのもう一つの根拠は、再三述べている、“笑道”の用例の桁外れの多さである。核心(head)となる形式にそれを修飾するかたちで実質的な意味を表す形式が結合している場合、その結合形式が談話の中で何度も繰り返し用いられると、通常、修飾成分がくどく感じられる。それに対して、意味が虚化した接頭辞が付加されて構成される派生語は、それが繰り返し用いられても、接頭辞の際立ちは低く、実詞による修飾成分のようにくどくは感じられない。例えば、“很小的孩子”と“小孩子”、あるいは「小さなとり」と「ことり」が談話のなかで何度も繰り返し用いられるという状況を想定されたい。“小孩子”や「ことり」が繰り返し用いられても“小”や「こ」は際立たず、“很小的”や「小さな」が繰り返されるほどにくどくは感じられないはずである。同様に、“笑道”の“笑”も〈笑う〉という実質的な意味を表さず、〈和らげ〉の表示として接頭辞化していたとすれば、その存在は際立ちにくく、“笑道”が繰り返し用いられても特段のくどさは感じられないはずである[4]。“笑道”が作者にとっても読者にとっても違和感なく多用される理由はまさにそこにあると考えられる。

『儒林外史』の“笑道”がネガティブ・ポライトネスの回避に特化した言わば強式の〈和らげ〉機能を担う複合語であったのに対して、“笑”が接頭辞的な形式に虚化した『紅楼夢』における“笑道”は、発話のタイプを選ばず広範囲に働く弱式の〈和らげ〉機能を担う派生語に近い動詞表現であると本稿は考える。

6. むすび

以上、『儒林外史』における“笑道”の用法を一つの手掛かりとして、『紅楼夢』における“笑道”の意味的および形態論的機能を探り、その特徴づけを試みた。ここに示した私見が仮に妥当なものであるとして、残る問題の一つは、なぜ章回小説の作者たちの多くは“笑道”に拘ったのか、とりわけ『紅楼夢』の作者はなぜそれほどまでに多くの“笑道”を用いたのかということである。それには多分に文学史的な要因が関わっていそうに思われる。

文献史上、“笑道”の歴史は存外浅い。この形式がテキストに頻繁に現れるのは『水滸伝』『西遊記』『金瓶梅』など明代の章回小説の登場を俟ってのことである。“笑道”という形式の成立にはおそらく上古中国語以来の“笑曰”が基盤となっているものと思われるが、『水滸伝』『西遊記』『金瓶梅』では文言の“笑曰”を用いず、“笑道”を用いている[5]。中国四大奇書と称される『三国演義』『水滸伝』『西遊記』『金瓶梅』のうち最も早く刊行された『三国演義』だけは一貫して“笑曰”を用いているが、『三国演義』より後の主な章回小説は『水滸伝』をはじめほとんどすべてが“笑道”を用いている。注目すべきは、元代以前のテキストには“笑道:～”のように直接発話を導くかたちで用いられる“笑道”の例が極めて少ないということである。宋代や元代の話本にお

[4] 刘丹青 2004 は、現代中国語の“V 道”における“道”を、文法化を経た結果の“标句词”すなわち complementizer としている。本稿は、少なくとも『紅楼夢』の“笑道”については、“道”は“标句词”ではなく動詞であり、“笑”の方が虚化していると見るべきであると考える。

[5] 『西遊記』については『中国基本古籍庫』により 697 例の“笑道”が策出されたが、“笑曰”も 5 例策出された。なお、ここでも“哈哈的笑道”や“微笑道、冷笑道”の類いは検索の対象から外している。

いてもその用例数は極少数に限られている。例えば『元代話本選集』では 24 例、『宣和遺事』ではただの 1 例、『清平山堂話本』ではわずかに 5 例が散見されるのみで、『大唐三蔵取詩話経』に至っては 1 例も策出されない[6]。“笑道”は明代の章回小説において俄かに溢れ出た感がある[7]。“笑道”は章回小説の作者たちによって見出された形式であると言っても過言ではない。このことを踏まえつつ、章回小説の作者たちが“笑道”を好んで用いた理由を考えてみたい。

章回小説とは、周知の通り、宋代に普及した話本のスタイルを模して書き下ろされた読み物である。話本とは、これもまた周知の通り、講釈師が聴衆の前で演じた「語り(“说书”)」の台本もしくは種本とされるものである。章回小説はその話本のスタイルに倣い、多くの作品が毎回“话说”や“却说”で始まり、“且听下回分解”の一句で終わる。

自らの作品を話本のスタイルを模して著わした当時の章回小説の作者たちには「語り」への愛着もしくは執着とも呼ぶべき意識が強くあったと推測される。しかし、聴衆を前にして肉声で聴かせる「語り」とは異なり、不特定多数の読者を対象に書き下ろされる読み物としての章回小説にはいくつかの制約が伴う。登場人物の和らいだ話し振りを伝えにくいというのもその一つである。聴衆を前にして生の声で語る「語り」であれば、講釈師の声色や抑揚あるいは表情の変化を以って登場人物の穏やかに和らいだ話し振りを聴衆に伝えることも可能である。しかし、目の前にいない読者に文字を通してそれを伝えることは難しい。講釈師の声色や抑揚や表情に代わって、文字表記としてさまざまなタイプの発話に〈和らげ〉を加えることのできる文法的な方策というものをあいにく中国語は持ち合わせていない。それでも、「語り」への意識が強い章回小説の作者としてはどうにかしてそれを読者に伝えたい。そこで“笑道”が選ばれる。作者は、発話の〈和らげ〉を読者に伝えるための語彙的手段として“笑”を選び“道”に被せた。『水滸伝』をはじめ章回小説の多くの作者が挙って“笑道”を多用する理由はここにあると本稿は考える。

最後に、では、なぜ『紅楼夢』だけがあのように突出して多くの“笑道”を用いているのか。これについては、差し当たり以下のように推測する以外に適切な答えが現時点では思い浮かばない。すなわち、『紅楼夢』の作者たちは、登場人物のポライトネスに関わる発話のあり方にとりわけ敏感な作家であり、加えて、「語り」の講釈師宜しく、その発話のあり方を丹念に読者に伝えることに殊のほか意を尽くすタイプの作家であったのだろう、ということである。聴衆を対象とする旧来の「語り」への愛着もしくは執着と、小説家としての読者への配慮。それは、ストーリー・テラーとしてのある意味では相反する二面性であり、またジレンマでもある。『紅楼夢』における“笑道”の多用とは作者たちのこの二面性もしくはジレンマの産物にほかならないとは考えられないだろうか。語学、文学いずれの領域からも広く批判を賜れれば幸いである。

〈参照文献〉

Goffman, Erving. 1967. *Interaction ritual: essay on face-to-face behavior*, New York：Anchor Books.

今井敬子 2004.「『紅楼夢』に見られる笑いについての一考察」，記念論文集編集委員会編『平井勝利教授退官記念中国学・日本語学論文集』12 - 29 頁. 東京：白帝社.

刘丹青 2004.《汉语里的一个内容宾语标句词——从“说道”的“道”说起》，中国社会科学院语言研究所《中国语文》编辑部编《庆祝《中国语文》创刊 50 周年学术论文集》110-119 頁. 北京：商务印书馆.

[6] 『元代話本選集』については CCL に基づき、『清平山堂話本』、『宣和遺事』、『大唐三蔵取詩話経』については『中国基本古籍庫』に基づく。

[7] 宋代の語録を代表する『朱子語類』にも“笑曰”は数十例策出されるが、“笑道”は 1 例も策出されない。

笹川洋子 2020.『おしゃべりなポライトネス――会話の中の共話・話題交換・笑い・メタファー――』, 横浜：春風社.